九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

歌論と添削 : 冷泉為村の実作指導理念

久保田, 啓一

https://doi.org/10.15017/4755940

出版情報：雅俗. 1, pp.85-104, 1994-02-28. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

歌論と添削

——冷泉為村の実作指導理念——

久保田　啓一

一

冷泉為村による唯一の歌論書として佐々木信綱『近世和歌史』（大正十二年）や福井久蔵『大日本歌学史』（大正十五年）にいち早く紹介され、特に後者では歌論の主要箇所の抄出も行われて注意を喚起するに足る記述も備わる『樵夫問答』（本稿ではこの呼称に統一）だが、簗瀬一雄氏の『碧沖洞叢書』九十一集（昭和四十五年）所収の「冷泉為村卿和歌御教誨」（底本は名古屋大学附属図書館神宮皇学館文庫蔵本。刈谷市立図書館村上文庫蔵本と対校）をもとに、伝存諸本を突き合わせつつ幾度か解読を試みたものの、その都度一種名状しがたいわけのわからなさに挫折を繰り返して現在に至っている。本書に対する積極的な言及が見られなかったのは、勿論著者冷泉為村が長らく本格的な研究対象たりえなかったからであろうが、内容解読の困難も大いに与っているのではなかろうか。自分の力不足を託つつもりはないが、注釈の筆を擲つたびに嘆息まじりに抱いた実感がこれであった。

もっとも、このわけのわからなさは、宝暦期に為村から『樵夫問答』を見せられた門人すべてにある程度共有されていたのではないかと思われる。嵐山の花見客数人のかけあいを樵夫が聞き、後日大井川の舟遊びでも再会して童に懸想文を見せられる、そんな設定の中に花・郭公・月・雪・述懐及び恋の歌が三百首近くも挿入され、恋になぞらえつつ和歌の本質を述

べて唐突に終わる。結構そのものが象徴的で、わずかに具体性を求めるとすれば冒頭近くの花見客達の四季風物優劣論議程度、他は茫漠たる文辞が連なるばかりの本書をどう読めばよいのか。しかも当の為村自身、もともと弟子一般に等しく執筆意図を理解してもらおうなどという気は毛頭なかった節がある。関東冷泉門の一人巨勢大和守利啓（旗本）に本書を送る際の添状[1]に、

（前略）兼而可入御覧希候一冊候故借進候。是は詠歌は愚昧之僻詞候へども、初中終に詞を書連、歌道之修行之便にも成候はんやと、冷泉門下之者あまねく熟覧候へかし。（中略）是は当秋与風詠出存立不経日数候物故、歌は麁々之物候へども、随分熟覧候人之附心難を申され候様に望候。無題に候。此歌何之題にてあるべし。熟覧候人題をつけて見候事も稽古に成候。一首〳〵にくわしく心をとめ、前後全篇の始末に心をとめてたれにても見られ候様にと存候。みる人不審之事あるべく候はゞ尋にあづかり度候。柴の戸をうちひらき、よの心をふくみ詞に候。一帖之作意はとかく道の義理執行心もちをさとらすべきために候。（中略）人々之所存をより〳〵申され候様に致度候。たゞ御尤なる事と見をかれ候事も無詮候。得心の事はケ様に得心と申こされ、不得心の事は不得心と申され候様に致度候也。是にては道理聞えず候、道理は聞え候へどもいかゞに候事ありなどゝたれにても無遠慮申こされ候様にいたし度候。それゆへ山賤をこしらへ、花下之遊客をもとめ、艶書をひろひたる童を出し候。皆譬喩之方便之詞に候。人々へみせてたづねをまち候事に候。

（後略）

と記しているように、為村は「道の義理執行心もち」を門下に悟らせようとの「作意」が十分に通じない場合を想定し、門人から遠慮のない質疑を発せられることを期待する。「山賤」「花下之遊客」「艶書をひろひたる童」の織りなす虚構は「譬喩之方便」であり、その譬喩の下に塗り込められた為村の真意を読み抜く作業が門人達に課せられた。そして相当の紙幅を占める詠歌群をそっけなく並べ、熟覧して題をつけてみるのも稽古だと突き放す。『樵夫問答』末尾近くの頭注に恋と歌論の関係を「恋の事と計見るはあしゝ。譬喩に而候」と規定した上で、「みる人のちからほどにみえ候はんと存候」というのと合わせ、為村は、理解できる或は理解しようと努める門人のみを相手にしたことがわかる。だがそんな為村の期待に応え

た門人などほとんどいなかったに違いない。明らかに『樵夫問答』より後に成立した聞書や門人の書簡に、本書に対する質問の条項を見出し難く、相当の数に上る伝本に注釈の書入を施したものが見当らない事でほぼ推察し得る。為村の希望に反して門人達は「たゞ御尤なる事と見を」いて引き下がってしまった。

特に扱いが厄介なのは三百首近い詠歌群である。中でも花・郭公・月・雪各五十首に述懐四十九首（管見に入った伝本で五十首完備のものはなかった）の歌群は、本書全体の約半分の量を占めるだけにその存在理由の検討を是非とも必要とするのだが、後半の恋歌が歌論部分の裏付けを得て多少とも読解の手がかりを残すのとは対照的に、具体的な四季景物及び述懐の作例と見るべきか、それとも背後に何らかの寓意を読み取るべきなのか、基本的な読解の立場さえ定まらないのが実情である。無題の問題にしても、為村は述懐歌の始まる箇所に「述懐五十首、歌の次第心をつけて題をつくべし」と注記するので、巨勢利啓宛書簡で「題をつけて見候事も稽古に成候」と言ったのは、述懐のみを対象としていて花・郭公・月・雪は念頭にない（既に一字題を付けている）と見るべきか、それとも花・郭公・月・雪二百首にも一首一首細かく題を付けるよう要求したと取るべきなのかが判らない。

とにかく、何とも捉えどころのない『樵夫問答』とその中核を成す二百四十九首であるが、せめて切り込み所の目安をつけられないものか、それに資する材料はないものかと長らく頭をひねり続けた。

二

無窮会図書館神習文庫に『為村卿御添削御門弟正容詠草』と題する写本がある。『潮来考』と合写されているが、これが『片玉集』続集巻四十三所収「雪月花題和歌」と同一の内容であり、木村正容という駒込住の与力の詠草に為村が合点と添削を施した歌稿の写しであることは承知していたものの、更なる調査を進めるには至らなかった。ところが、最近になって正容の詠歌が花・郭公・月・雪・述懐各二十首の計百首から成り、しかも『樵夫問答』とほぼ同時期の成立である事に思い

当った。『樵夫問答』は、石野氏「近世堂上派随想」で石野広通編『止静心院殿御藻』の「樵夫問答宝暦元年四十歳」との記事を根拠に宝暦元年成かと推測されている。前掲巨勢大和守利啓宛為村書簡中に為村が「吹上の辺」即ち月光院への『樵夫問答』送付を依頼しているとの石野氏の考証に従えば、月光院の死が翌二年九月である事から同書簡の日付十一月廿一日は宝暦二年ではあり得ない。一方の『為村卿御添削御門弟正容詠草』（以下『正容詠草』と略記）には次のような元奥書がある。

右一帖、止静心院澄覚殿の（故宗匠為村卿の筆を被遣し所なり――以上割注。以下同）先年門葉にあまねく勧給ひし五首題の詠也。木村左膳正容（駒籠の住、与力）予が亡父にうち〳〵この道を談じ、同門となり、此詠京進かく示し給はりしとて持来りて先人にみせ申。傍に侍座して強て請得て一夜にうつしぬ。尤正容ことにかすことを許さゞりしを強て写ける書なり。わが子孫漫に外見すべからず。

宝暦初のとし

其後年比をへて居常拝見実編索たらむとす。よて再衰老の筆をとる。

寛政十一年己未秋九月十三日

恩憐一閑人八十残喘源和鼎謹誌

木村正容が為村添削済みの歌稿を成島和鼎の父信遍に見せに来たのは「宝暦初のとし」であった。また花・郭公・月・雪・述懐は「先年門葉にあまねく勧給ひし五首題」に基づくものだった。門人の稽古用に指定した五首題を詠じた二百四十九首を中心に据える『樵夫問答』は、一与力への個人的指導か、門人全員の回覧を期待するかの違いこそあるものの、自らの和歌に対する姿勢や価値観を伝達する意味において『正容詠草』と同一の意識による成果と見てよいのであろう。となれば、『樵夫問答』を読み解くにあたって、『正容詠草』に見られる為村の添削・批語はこの上ない注釈の一つとなり得るのではないか。一歩譲っても、ほとんど同時期に為村が実作指導において明示した理念を『樵夫問答』に何がしか照射してみる有効性は否定しがたいように思われる。抽象的な表現を幾重にもまとい、全篇の詳細な読解によってしか狙いが明らかとならない『樵夫問答』と、百首の歌の個別的・具体的な評価こそ知れるものの体系性には乏しい『正容詠草』とでは作品の質が

大きく相違するけれど、『樵夫問答』への第一歩として同時期の為村の和歌観なり指導理念を確認しておく意味はあろう。二百四十九首の存在意義もこの作業を手がかりとして初めて検証の対象たり得るに違いない。

三

為村は正容に詠草を返すに当って、指導の要諦を適確にまとめた書状を添えていた。百首の添削の総論と見られるもので、個々の事例を取り上げる前に一覧の必要がある。無窮会本・片玉集所収本のいずれにも存するが、津村正恭と成島和鼎の親交を鑑みてより原本に近いと推測される片玉集所収本の本文に従って掲出する。ただし、無窮会本の本文による校訂を施した箇所には傍線を引き、右に片玉集所収本の本文を〈 〉に入れて並記した。[2]

二五の吟詠熟覧候。かず〳〵よくぞよまれ候。案の及たるも見え、たらぬも見え、はじめてひらきみし時はいづれもよしとおもひたまひしに、二たび見て汚墨をもそへ愚存をもくはへ候に、三度四度くりかへし見候へば、又これはおしく〈みぐるし〉かれはみぐるしとおもふ事見出し候。はじめくはへし点をもすり、批言をもそへたる所々あり候。此内清書すべしとある五首を書てこすべし。げに歌をよむは、朝よみたるを夕に吟じあぢはひ、けふの歌をあすまた二たびも三たびもおもひめぐらせとの庭訓に候。これをおもひわきまふべし。短慮の僻案みるたびごとに難もそひて、見のこし書のこしたる事もあらんとおもひ候まゝ、僻案の批詞得心不得心の事申こさるべし。よむ事のかたきにあらず、よくよむ事かたしとのをしへをおもふべし。よくよまんとおもふまゝあしくよむまじとおもひてをのが力に過たる事をたくまずして、たゞやすらかなるべし。二五のうちにも、意は聞えて詞とゝのはぬあり、詞は聞えて意とゝのはぬあり。詞意ともにあしきもあり。これは吟味のたらぬなり。さればとてあまりいりほがに案をこらせばあらぬすがたになるものなり。やすらかなる事肝要に候。さす竿よりも心のしるべをたゞしくすべし。

為村（花押）

為村は数度の「熟覧」の結果ようやく確定した合点と批言に対し、正容の「得心不得心」の返事を期待する。更に詠歌の心構えとして「よむ事のかたきにあらず、よくよむ事かたし」と『悦目抄』の冒頭を引きながら、「たゞやすらかなる」歌を詠むよう指導する。『悦目抄』の一節は『樵夫問答』の遊客の一人にも「よむ事のかたきにあらず。よくよむことかたしとひじりのをしへたまふもかしこし。かならず我をわすれて、よき歌の出来ぬをくるしみ、人のめにはみにくき詞をわれはよしとおもふくせのはなれぬもわりなし」と言わせていて、門人の力みを除くための教えの枕に好んで置く表現だったようである。「よくよまんとおもふ」事と「あしくよむまじと」思う事の関係については、『義正聞書』に、

> 澄覚殿仰に、能歌を読んと思はず、悪敷歌をよむまじと思ふが宜し。人ごとにほめらるゝ歌をよみたがる故悪敷候。笑れぬ歌を読べし。[3]

とあって、宝暦初年の段階では両者が「まゝ」で結ばれ、ともに「をのが力に過たる事をたく」む姿勢につながる力みをはらむ点で否定的な用語であったものが、『義正聞書』では対立的に捉えられて後者の自在さを為村は称揚する。結果的に趣旨は同じでもこのように時期によって用語の意味に揺れがあるのは歌論としての限界を指摘せざるを得ないが、『義正聞書』に至ってようやくなじみの表現をより効果的に修辞として使用し得たと見れば、本書簡の一節の存在は貴重な前提となるであろう。

末尾近くの意と詞の問題はそれこそ歌論の中心命題として古来さまざまに論じられ、為村の独自性はないが、歌がやすらかであるための工夫として詞や心に留意した具体的な添削には、やはり和歌に対する為村なりの柔軟な感性が認められるし、初心者の詠歌指導としても触れない訳にはいかないらしい。言わんとする所が十分伝わりにくい事を考慮して、為村における意と詞の位置付けを、萩原宗固の問いに答えた『冷泉宗匠家伺書』（宝暦十一年十二月～十二年八月の聞書。宗固自筆と推定する。天理図書館蔵）の中からも探ってみよう。

> 歌の言葉と心とは車の両輪鳥の両翼のごとく、何れを先後と申がたく哉。八雲御抄用意の部に書せ給ひ候御事共もあらましは心得罷在候へども、詠出いたし候時詞を優美につゞけ申時は歌の心聞えがたく、歌の心慥にと仕立申候時は詞つゞ

き或はつまり或はのび過申候歟。又は俗に相聞え申候。この所、こと葉をもつぱらに致べく哉。心を専用にいたすべく哉。又歌数多詠出仕候時は、こゝろこと葉共にすら〳〵と詠可申哉。とかく理屈がましく罷成申候様被存候。

右の宗固の質問に掲げられた『八雲御抄』用意部が、「心をさきとすべき事」「詞をさきとすべき事」を並記して心と詞の充実を求めるのを承知しながら、実作の場ではいずれかに重きを置けば一方が疎かになるのではないかとの不安に、宗固ほどの年齢と学識を積み上げた門人でさえ苛まれたらしく、それを打ち消すようにまず為村は、

情と詞の前後はしれたる事なり。情を先とし詞を後とする也。常に人の物いふも情よりいでゝ詞出る也。詞を先としては何かいはす詞ぞ。これしれたる事也。輪翼のたとへは情と詞とは対らぶ事也。先後の沙汰無謂候。むつかしき心もちなり。

と断ずる。心と詞を鳥の両翼に譬えた例では、為村にとってまさに金言の藤原定家『毎月抄』の一節「所詮、心と詞とをかねたらむをよき歌とは申すべし。心詞の二はたゞ鳥の左右の翅のごとくなるべきにこそとぞ思ひ給へ侍りける。但心詞の二をともにかねたらむはいふに及ばず、心のかけたらむよりは、詞のつたなきにこそ侍らめ」（『日本歌学大系』第三巻三四九頁）が思い浮かぶが、定家とて左右の翅に心と詞をなぞらえてこそいるものの、心の方がより本質的であると「但」以下の部分で明示していて両者を同格とは見ていない。そもそも『八雲御抄』も「詞をさきとすといへるは、心を後にせよといふにはあらず。心あれど詞の聞きにくきはわろければなり」（『日本歌学大系』第三巻八二頁）といい、心あっての詞という立場を持していた。為村は『毎月抄』や『八雲御抄』を素直に読むことを宗固に要求し、「輪翼のたとへ」が誤解を招きやすい点を注意して、無用の心配を取り除こうとする。『冷泉宗匠家伺書』の為村の答は続く。

歌は自然にいづるものと思ひ候。あまり入ほがにせずにやすらかにすら〳〵とよむ事也。心の事、多分歌の心と心得候。あしく候。心は常々の心もちなり。歌よむ心、物食ふ心とて二つはなし。初学の人は歌数をすら〳〵とよめばをのづからやすらかなる也。（後略）

正容に与えた書簡では、詞が整わない歌・意が整わない歌・詞意ともに悪い歌と、避けるべき歌を三つの型に分けるが、詞

と意をどう考えるべきかについての明言はなかった。十年程後に宗固へ答えた段階では、平常の心持ちが即ち歌の心なのであり、己の心に任せてすらすらと数多く詠めばよいと、詞よりも心を重要視する立場を明確にした。宝暦初年時点での為村にも心重視の姿勢を認め得るのか、これは添削の実例から検証するしかない。そして心と詞の充実から導かれる「やすらか」な歌とは詰まる所何なのかが解明されれば、同時期に成立した『樵夫問答』への一つの視点を獲得できるかもしれない。

四

ある一首についての添削が一つの観点に限定される事はむしろ稀で、いくつかの問題を内包するのが自然であろう。為村の和歌観を多面的に捉えるためにもそういう事例が望ましい。

②おくまでは分もつくさずよしの山ふもとの花に心とゞめて

　　枩の花を賞翫は聞えたれども、おくまで分つくさぬとは花に心浅く候。おくまでも猶分みばや、ふもとの花をはじめにといふかた可然候。

　　おくまでもなを分みばやよしの山あかぬふもとの花をはじめに

とあるべきが。

花の題で詠ずる以上、花を賞翫する心が根幹にあって、それが詞によって十全に表出されなければならない。つまり一首全体を花への愛着が支える必要があるが、この場合は花への愛着の度合が低いと為村は言う。なぜかといえば、吉野山の麓の花に心を留めるのに対して山奥までは踏み入ろうとしない、山奥の花をも賞翫しようという心が乏しいからである。山奥と麓の花を分断して麓にしか賞翫の心を及ぼさないのでは不十分だと為村は言いたいらしい。改作によって麓を手始めに山奥までも心を馳せる奥行が生まれ、吉野山の花全部をも包括する連続性と大らかさが表われる。

賞翫は詠作上最も基本的かつ重要な心の作用と見られ、為村はしばしばこの問題を採り上げる。

㊷おさまれる都の秋にすむ人やおもふくまなき月をみるらん

京都の秋を賞翫尤に候へども、都の外に住人はおもふ事あるやうに聞え候。もしくは、

おさまれるみやこの秋にすむ人は猶しづかなる月やみるらん

などあり度候。

これも殊更に都だけを切り取ってその秋を賞翫するだけでは不十分との判断があっての添削であり、「猶しづかなる月やみるらん」と改めることで言外に都以外の住人も同類として含め、中でも都は治政の中枢として一層の静けさに充ちていると、連続的に捉え直された。②と添削の理念は同一と言ってよい。歌に描かれる世界が限定的で広がりを持たないと賞翫の心までもが小さくなるとの考えである。

或いは、㊶「さえ〴〵しよはのあらしをおもふにはつもるもうすき嶺の初雪」について、「冴し嵐をおもへばかほどよりはふかゝらんとおもふ雪のあさきといふ事、賞翫の様にて不賞翫候。ことに初雪なれば不依浅深賞翫候」と、初雪の本意の認識不足から来る賞翫の欠落を突いたり、㊹「おもへわが垣ほの内のものとのみ見はやす雪のふかき心を」の「わが垣ほの内」について、「賞翫のあまりなれども、一天の雪をわが物に領したる、あしく候」と、余りに賞翫の念を強く露わに述べ過ぎる点を指弾したりと、賞翫に関する留意点はいくつかあるが、いずれにせよ素材・題材への愛着・愛情を本意から十分に引き出して一首全体を傾けて描く、しかもそれが過度に至らず穏当に行われるべきであるとの見解を語ることに変わりはない。そしてどの例でも賞翫の心をより適確に表現するために詞の彫琢が図られるのであって、心がうまく伝わらなければ詞に手を加えるしかなく、詞は問題なく納得されても心が不足という例は実際のところ見出し難いのである。正容宛書簡では対句の一方として「詞は聞えて意とゝのはぬあり」と言った為村であったが、「意とゝのはぬ」歌の詞がすんなりと受け入れられるはずはなかった。為村はやや安易な修辞に走り過ぎたようだ。彼の立場は定家のそれと変わりはしない。むしろ「心」重視の程は定家を遙かに上回る。例えば次のような目新しさには乏しい歌にも、「賞花木之意深重に候。（中略）愛情無他候ゆへ」との理由で為村は加点しているのである。

⑧うへをくは我ためのみか後のよの人もみはやせ花の一もと

五

四季の景物に向けた心を人の内面に照射させれば述懐となる。詞を発する主体の心そのものを重視する為村の目は、述懐歌においてはいささか均衡を欠くかとさえ思わせるほどに歌の表現そのものよりも述懐の内容を問題とする。

㊶〳〵をくるゝもおなじ入江にさす棹のしるべをあふぐわかのうら舟

しるべをあふぐ、崇敬の意尤に候へども、松の陰あふぐなどゝは違て耳に立候。趣意至極尤に候。

「さす棹のしるべ」の縁で「まかす」と添削したのはもっともものことで、詞の上で「しるべをあふぐ」は整っていない。しかし為村はそんな欠点よりも和歌の道に遅ればせながら足を踏み入れた正容の、純粋に師家を崇敬する心に免じて、いやその一点のみを評価して凡庸といってもいい過ぎではないこの歌に合点を加えた。仰ぐべきは冷泉家のみではない。㊾「あふげ猶愚なる身もへだてなくつかふるかずにもれぬめぐみを」の歌も、「一首さしたる事はなく候へども、主恩を存するの意趣難捨候間」加点される。幕臣の末端近くに位置する与力が将軍家の御恩に寄せる思いを感じての処置であった。

さらに目を自己の心に向けたとき、他者に対する敬虔さがそのまま内省として作用すれば、そこに「正直」の概念が生じる。㊷「一ふしとねがふ心もすなほなる竹をすがたの言の葉もがな」は、「ねがふ」と「もがな」の重複もあって合点は施されなかったが、その趣旨は「正直をねがふ心珍重に候」と評価されている。ここで留意すべきは、正直であることがあくまでも自己の内面の充実を目指している点で、他人への働きかけという形の心の拡散を為村が否定していた事である。それを示す添削がある。

㊿〳〵さらぬ時おもひも出ようきたびに神よ仏といのる心を

此歌趣意感心に候。誠に正直之心に候。但二の句、自身の事可然候。おもひも出よとよみては人上の教誡になり

候。一首の意、人情多少如此に候。おもひも出よにては忘時あり候。不忘者神仏之加護猶可弥増歟。

「おもひも出よ」では忘れる時もあるから、というのは、「おもひも出よ」が「人上の教誡」つまり他人事になってしまって自らの覚悟を述べるには弱いという理由による。述懐ではないが、⑦「心しておりなやつしそ山ざくらあすもとひきてみん人のため」の二句を「おりはやつさじ」と改変した上で加点し、

此歌仁心に候。さりながらおりなやつしそと下知して人を誹謗するになり候故、結句の仁心にかなはず候。折はやつすまじと我をいさむる方よろしく候。

と述べるのも同様の論理に拠っている。

自らを内部に集中し収斂させていくのを主題とする述懐歌が、詞の上では多少の欠陥を有していても評価の対象となりやすかったのは確かのようで、それは為村の加点歌数にも表われている。即ち花・郭公・月・雪・述懐各二十首のうち、合点の付されたのはそれぞれ十・七・八・六・十四首で、為村の採点が述懐歌に対しては少し甘くなりがちであったと見てよさそうなのである。勿論、この差のみにあまり大きな意義を認めようとするのは無理だか、為村の志向はある程度窺えるのではないか。歌論として明確に正直の問題を掲げた『冷泉宗匠家伺書』の記事にもいずれは継承されてゆくと見てよかろう。宗固の、

和歌の道もつぱら正直を相守候儀に御座候所、花を雲にまがへ、紅葉を錦とながめ申ほどの儀は可有之事に存候。恋歌などにいたりては、むねはふじ袖は清見が関なれやなどやうなる義はあまりに虚言にて、正直の和歌道には如何と奉存候。夫共詠方にて是また正直に相叶申候義も御座候哉。恋歌などは思ひみだれ候心より申出候事に御座候へば、かやうの虚にわたり申候義も不苦義に御座候哉。

との質問は、正直をいささか律儀に考えすぎた嫌いがあり、表面的な言葉の虚実に拘泥した結果、却って論点が本質から離れてしまった。しかし宗固にとっては、心と詞の相克という抜き差しならない重大事だった。為村の答はいとも簡単に心の優位を導き出す。抽象的な本質論に終始するけれど、その姿勢は頗る明快だった。

衆人まよふ事也。此を余情といひてかつて虚言にてはなし。歌よむ心を正直にする事也。心正直なれば詞にはかゝはらぬ事也。是を虚言と見るが則心の不正直也。むかしよりよみ来たる詞の虚実を吟味せずして、たゞむかしからのよみたる事じやとおもへば、則正直也。詞の虚実をおもふ事、細々の事也。心の正直第一なり。是にては得心なくば、いく度も心にうちつくほど尋べし。ケ様の境、歌よみの大切なり。歌は心より出て神の心なり。かたじけなくおもふべし。かりにも心を不直にせぬ事なり。

『冷泉宗匠家伺書』には、他にも言葉の本義の吟味を不必要とする論調が目立つので、このような極端な見解の表明となったのかもしれない。ただ、ここで「むかしよりよみ来たる詞の虚実を吟味せずして、たゞむかしからのよみたる事じやと」思うのも正直だとの明言を得ることで、純粋の精神修養のみで律せられない、伝統表現への忠実という「正直」のもう一つの面が見えて来たのは注意される。先にも述べたが、為村の心と詞そして正直に関する論は先行する近世堂上歌論の枠を出るものではない。「まこと」を中心に据えた諸論[5]をより曖昧に総括するかのような、必ずしも論理的とはいい難い文章に独創性は乏しい。しかし、例え昔からの詠法に従うという、ある意味では消極的な「正直」に止まるにせよ、この一点で「正直」と「詞」が切り離されずにすむ、つまり表現の面からも「正直」の何たるかを探る道が残されている事は、容易に他の宗匠の及びがたい質と量の添削例を持つ為村の真面目を知る上で貴重なのである。正直な心あればこその「やすらか」な歌だが、「すべて詞はやすらかにして心のよく聞ゆる様に心がくべし」（65）「けさは先砌ひとつに見はやさむ野山の雪のふりまさるとも」の批言の一節）とあるように、「やすらか」さを支える詞を全く等閑視するわけにはいかない。心に従属するとはいえ、心を盛る器としての詞には相応の規格が必要だった。

六

正直な心の流露をやすらかに詞に定着させるにはどうすればよいのか。以下、いくつかの観点から為村の理念を究明して

みたい。まず四章の冒頭に掲げた②と㊷の添削例に立ち戻る。先程は「賞翫」に焦点を据えたが、今度は表現上の改作過程を検討する。②では麓の花を契機に深山の花へ、㊷では鄙の住人の平穏を言外に前提として都の一層の安定へと、ともに詠み手の視線なり発想が空間的広がりと連続性を有するように改変されていた。例えば次のような例も同類と言えようか。

㊻おなじよにみる影ながらしづかなる心にぞすむ山のはの月

おなじよにと出たる、不相応候。一首とゝのはず候。たとへば、

よひのまもみし影ながらふけて猶こゝろしづかに月ぞすみそふ

などゝ候はんか。

この場合、「同じ夜」では一首を律し切れないとの判断があった。「ながら」が生きず下句へとうまく連接しないのは指摘の通りであろう。そこで為村は「よひのま」と「ふけて」の二つの時間を設定して、時の経過と連動させて月光の清澄と心の平穏の度を増さしめるよう工夫する。以上三例をあわせ見れば、いずれも添削の要の位置に特定の語が無理なくすわっている事に気づく。即ち時間的・空間的連続性を支えるのは「猶」の一語に他ならなかった。ここに為村の添削のポイントの一つがありそうだ。なぜかというと、彼の添削を改めて見直してみると、「猶」に重要な働きを負わせる例がいくつも見られるからである。㊾「すむ影もおもひなしかとみるばかりこよひの秋の月のくまなさ」の三句以下を「みれば猶秋の最中の月のくまなさ」と変えて「おもひなしかとみれば、いや〳〵おもひなしにてはなくて、もとより月のさやかなるといふ意」を浮き立たせたのは偏に「猶」の効果にかかっている。[6]また、次の例は「猶」の実効を最も明瞭に言挙げしていて興味深い。

㊱〳〵のぶるとも猶かぎりあるよはひとはしりてもねがふ人の世中

趣意尤に候。もとより此歌の理かなひ候。作者の意はしらず候へども、猶の字、一首の眼に候。延寿を祈願して寿をたもちてもつゐには限あるよはひといふ所、猶の字にこもり候。

これは為村が「猶」を付したものではなく正容の原作そのままでよしとした例で、「猶」の意味するところも今までのものとは若干異なるが、「一首の眼」と「猶」を規定する為村の目は通い合う。為村にはこの「猶」のような添削上の秘術がい

くつも用意されていたのではなかろうか。『義正聞書』で宮部義正が冷泉家の添削の周到さに感嘆してその理由を問うたのに対し、為村は、

当家は若年よりも人の歌を見る事、歌仙の家ゆへ也。尤家ばかりにてもなく、一首をとりまはし添削する事、此方にいやといはれぬ秘伝ある事に候。伝なくては人の歌は指南は決してならぬ事なり。一首の慥かに調ひたるといふ事をしつかりと合点する事ならぬ故也。

と答えている。「秘伝」の内実は明らかではないが、実際の添削から帰納してみて、「猶」を為村がかなり意識して使用したことだけは確認出来るから、「秘伝」に近い指導上の眼目のごとき詞であった可能性はある。原作のままでは素材相互の関連が乏しく一首としてのまとまりが悪い時、詞と詞を緊密に結びつけてやすらかに詠み下すための接着剤として「猶」は有効に作用した。

また、空間・時間の広がりと連続性にも関連するが、素材の遠近が問題となる場合がある。

㊴をちかたの空にしたひし時鳥軒ばをすぐるこゑはめづらし
遠近(ソン)あまりに候。ちかきよりとをざかるかたならば風情あるべし。事浅薄なる歌にも、たとへば、
をちかたの空にぞしたふほとゝぎすまくら過行こゑの名残を
などゝ候へば情ふかく候。歌はすべてかやうの境可為工夫事に候。

㊻冬枯のこずゑさびしき山端に今より雪のつぎてふらなむ
庭などの様にちかき庭をゝきて山までとは手遠に候。三の句を庭(庭)の面にしてはあしく候哉。近をすてゝ(近をすてゝ)遠をもとむれば、かならず心のいたるところにいたらぬものなり。古歌に、
今よりはつぎてふらなんわが宿のすゝきをしなみふれるしら雪
よく味べし。まことに眼前の景色に候。

㊴は、遠方で鳴いた時鳥が軒ば近くまでやって来たという奇矯な設定を難じて「ちかきよりとをざかるかた」へと導く。㊻ではあえて身近でない遠くの山の雪を待望する必要があるのかと問いかけ、「眼前の景色」にまず目を向けるべきことを古今集の例を引きつつ説く。どちらも「遠」よりも「近」を重んじる点は同じで、まず身近な所から歌の着想を得てそこから自然と疎遠な方へと展開させようとの為村の意図は明らかである。そしてこの図式は「猶」を絶妙に用いた前掲の歌と似通う。

さらに、身近な所に発想の起点を置きつつ遠方の想像により重心のある歌は、「おもひやる」表現に留意する必要がある。

㊵山ふかみ雪はいくへかつもるらんふもとの里も日かずふるころ

五文字、みにてはあしく候。山ふかみといへば深山にての事なり。おもひやりたる意なれば、山ふかき雪はとなくては聞えず候。只一字の事にてよくもあしくもなるものなり。心をつくべし。

「山ふかみ」では視点が深山の中にある事になって「おもひやり」にならないとの指摘は尤もである。ただ「おもひやり」は、足場を、即ち身近な発想の起点を固めた上で辞句に細かく配慮しなければ成立しない高度の技法でもあった。㉘「ほとゝぎすよそにはいまだ忍ねもまづ待里をわきてなくらん」が「おもひやりあまり過候」と評し去られたのは、「よそ」の「忍ね」と「まづ待里をわきてなく」郭公のいずれを「おもひやる」のかがはっきりしないからであろう。末尾の「らん」がこの混乱の原因を為すのは言うまでもない。伝本いずれも「らん」の右に「かな歟」と補記するが、これは他の添削例と照し合わせても為村の言とは考えにくい。書写者の注記がそのまま写し継がれたかと思われる。為村は「らん」を気にしたからこそ想像過剰と断じた。

本章に取り上げた事例を総括すると、すべて歌柄を大きく奥行きを深く、しかもなだらかに一首を整えるべく工夫した為村の苦心の技術とでもなろうか。素材の効果的な配列と相互の緊密化によって、時間的・空間的そして心理的に自然な流れが一首全体に生じる時、為村の目指すやすらかな状態が微妙な均衡の上に獲得されることになった。

七

前章では主として素材の構成法に基くやすらかさを分析したが、素材の料理法、つまり趣向の立て方もやすらかさと関わる時がある。為村は趣向の案じ方がいきすぎて全体の調子を乱す場合もやすらかさを損なうと考えた。「求過ぎ」と彼は評する。

㉛うたゝねの枕とひきてほとゝぎす親のいさめをしのべとやなく

下句もとめ過候。

「親のいさめをしのべ」と時鳥に鳴かせるのではあまりに唐突で、調和を乱してしまうのも当然である。また題との関係で、題の指示以上のことを詠み込もうとするのも「求過ぎ」とされる。

㊸おもふどちひとりふたりと待えても見ばやくまなきよはの月影

題詠の躰に候。独対月の歌なり。月一字の題には求過たり。一二句詞意ながく候。

『正容詠草』は花・郭公・月・雪・述懐の題のみでどれほどの詩想を紡ぎ出せるかを指導目標としていたらしく、安易に「独対月」のように限定された題詠の世界に逃げ込んではならないとの教えなのであろう。㊶「昨日みし最中の秋の光をもそらにとゞめて月やすむらん」を「十六夜聞え候。求過たり」と評するのも同様で、「十六夜月」に限定するのは「月一字の題」に対してふさわしくない。或いは「求過ぎ」の言こそないものの、次の二例も一括できるであろう。

⑨をそくとく日かずかさねてさくら花猶いくもともうへそへてみむ

花の木ををそくとくうふる心か、桜を猶いくもともうへそへてをそきとき花をみんといふ心か。花一字の歌にはあしく候。（後略）

⑲川なみのよるのあらしに氷ゐて汀もわかずふれるしら雪

題詠の歌なり。題詠といふは、川辺雪・水上雪（水上雪）・汀雪ならばかくても聞え候。雪一字の歌にてはよからず候。

（後略）

⑨は「をそくとく」の不明瞭を批判の中心に据えるが、「栽花」ならまだしも「花」一字の題にあれこれ盛り込もうとしすぎたのがよくなかった。⑲は題詠の実例を明示してゆき過ぎを実感させている。つまり指定された題に過不足なく己の発想をそわせて、殊更に趣向を狙おうとはしないのがよいとの考えを為村は持っていた。『義正聞書』に、

求過たると思ふ歌に、したてがらにて思ひの外よく成たる歌も有事也。又案じ過てあしき事も有。此境むつかしく候。たゞ古歌の観念心に染る程あしき風情を求過ぬ様に成事也。能〳〵古歌を熟覧する事稽古の第一也。

とあるように、これまでの常識を覆すような奇抜な趣向が却って歌をよくする事もあった。事実、為村の歌には先例を求め得ない新奇な表現が間々見られ、それが一首の調和をいささかも乱さず、むしろ活力を与えている場合がある。まさに名人なればこそなのだろうが、こんな芸当を初心者が真似たところで歌の体をなすはずもなく、まずは古歌の世界に沈潜して己の詩嚢を肥やし、題の要求に見合う表現の型をより多く身につけるのが第一なのである。題に即した「求過ぎ」でない趣向を心がければ、初心者としてまずは無難な歌が出来る。為村の指導はこうしてやすらかな素材の扱い方を納得させていった。

八

『正容詠草』には他にも豊富な批言があり、また別の具体的な教示をいくつも抽出できるであろうが、ここでは複数の事例によってある程度一般性を持たせられるものを中心に検討を加えた。もしこの成果を『樵夫問答』解読に応用するとなれば、批言によって得られた為村の和歌観を二百四十九首に反映させ、個別的な詞への批評を汲み上げて同じ詞を有する作品注釈に生かすという手続きを取らねばならないだろう。だが本稿では、『正容詠草』によって、『樵夫問答』自体の抱える

わけのわからなさの解消に踏み出す目処を印すことを目的とする。個々の歌の読みに入る前提、即ち二百四十九首全体の性格付けに資することができれば当面の目標は達せられたと見なければならない。

さて『正容詠草』百首と『樵夫問答』二百四十九首はどうつながり、どう相違するのか。先に『樵夫問答』の無題の件を取り上げた時、花・郭公・月・雪と述懐が同列に並ぶか否かを疑問とした。結論的に言って、同列であって同列ではないとするしかない。まず題が『樵夫問答』と『正容詠草』とで同様に設定されていたかどうか。『正容詠草』では為村は、細分された題詠歌にならないよう繰り返し指摘した。五つの単純な題からどれだけ多くの表現を引き出せるかが正容に与えられた課題であった。つまり『正容詠草』は無題なのではなく、花・郭公・月・雪・述懐という限られた手がかりしか与えない題で詠み出せる歌を求め、類題集等で手慣れた題詠に泥むのを厳しく戒める指導の場なのであった。一方の『樵夫問答』はどうか。花・郭公・月・雪を素材とするのは言うまでもないが、為村はこれを題と意識していたのかどうか。『樵夫問答』二百四十九首の冒頭二首と五十首目（花の末尾）の都合三首を以下に掲げる。

春たちし日かずかぞへていつよりもをそしといそぐ庭の初花

さくをまつわか木の桜うつし植てまだみぬ花をいかゞとぞ思ふ

とくさくはちりぬる後の弥生山うつろふ花にはるぞくれ行

花五十首が「春たち日」から「はるぞくれ行」頃までの季節の流れに沿って配置された様子は、この三首からでも十分に想定できよう。これは「初こゑ」に始まって「一こゑも思ひがけぬを」に終わる郭公、「またれし月の秋は来にけり」から「ゆく秋の末葉にうつる月」までの月、まず雨ふる都から「をち」の雪を思い「行年のわかれ夜ふかき雪」で締め括る雪のどれにも共通する様式であった。この二百首は花・郭公・月・雪の素朴な題ではとても律し得ない。前に挙げた三首なら、試みに「初花」「栽花」「暮春花」とでも題を付けない以上、十分な鑑賞は無理であろう。『樵夫問答』二百四十九首はすべて無題で門人の前に投げ出されたのである。その意味では四季景物と述懐は同列に論じなければならない。

では、述懐歌の冒頭に念を押すかのように改めて題の考察を指示したのはなぜなのか。無題という点で他の二百首と何ら

変わりはないのに、どうして「歌の次第心をつけて」題を付することを再確認しなければならなかったのか。ここで『正容詠草』の述懐歌を想起する必要があろう。宝暦初年の為村が述懐歌を重要なテーマとして認識していたのは先に見た通りである。『樵夫問答』が何かに寄せた述懐を並べ、『正容詠草』が内省を基盤とした純粋な述懐のみという違いはあるが、『樵夫問答』でも述懐に特別の思い入れを持ったとしてもおかしくない状況が当年の為村にはあった。組題を念頭に入れつつ順番を検討していく作業は同じでも、「述懐」の部に入るにあたってなお一層の注意を喚起せずにはいられないという思いが、為村に特別の注記を加筆せしめたのであろう。その意味では述懐は他の二百首と同列ではなかった。

為村の添削と歌論を突き合わせて読む試みの最初の階梯に上りはしたが、その高さからは依然として『樵夫問答』の正体は見えない。擲った筆を拾い上げてまた一歩ずつ注釈をつみ重ねていくより他に仕方がないようである。

注

1　石野政雄氏「近世堂上派随想」（三古会編『近世の学芸――史伝と考証――』〈昭和五十一年〉所収）に掲載。しかし宮内庁書陵部蔵『片玉集』後集巻九十六所収「冷泉為村卿御作物語」（『樵夫問答』の別称の一）に付記された書簡本文とは細部にわたって多くの異同がある。石野氏の拠られた底本は明らかでないが、対校の結果明らかな誤読と判断される箇所もあるので、引用は『片玉集』の本文に従う。なお、適宜濁点・句読点を補うのは以下の引用も同様である。また、添状以外の『樵夫問答』の引用も『片玉集』に拠った。

2　無窮会本は前掲和鼎の奥書の後に、享和二年十一月の橘正方、文化五年四月の藤原思敬の奥書が続き、さらに末尾に「又かり屋尾女写」とあるので、転写を少なくとも五回（和鼎二回）繰り返している。一方の片玉集所収本は恐らく和鼎から正恭へ直接写し取られているから、系統の上では片玉集所収本を重視するのが当然である。しかし本文の状態に

さほど顕著な差違はなく、必要度の低い助詞類の省略が目立つ一方では片玉集所収本の明らかな誤写・誤脱を訂する本文を無窮会本が有する場合もあって、部分的には無窮会本の本文に拠らざるを得ない。なお本稿に引用する『正容詠草』の本文はすべて同様の処置を施してある。二本の校異を明記した全文の提供は別の機会に譲る。

3　引用は大阪市立大学附属図書館森文庫蔵本の本文に拠った。

4　『正容詠草』百首に私に施した通し番号。①〜⑳「花」、㉑〜㊵「郭公」、㊶〜㊿「月」、(61)〜(80)「雪」、(81)〜(100)「述懐」。

5　高浜充氏「歌論におけるまことの系譜――古代より中世へ――」(『国文学研究』七、昭和四六・一一)、上野洋三氏「元禄堂上歌論の到達点――聞書の世界――」(『国語国文』四五―八、昭和五一・八)、飯渕由美氏「近世初期地下歌論における「まこと」――『超大極秘五字傳』を中心として――」(『国文』六一、昭和五九・七)等に諸歌論の検討が行われている。

6　㊾歌の添削と批言全文は、既に拙稿「堂上和歌の伝統と文化圏」(『日本の近世12　文学と美術の成熟』〈中央公論社、一九九三・五〉所収)に掲げ、分析を加えている。御参照いただければ幸いである。